

日本キャンプ協会「キャンプ保険（国内旅行傷害保険）」の事故分析
Accident analysis of National Camping Association of Japan "camping insurance (domestic travel accident insurance)"
小西岳勝(静岡県立朝霧野外活動センター) 太田正義(常葉大学教育学部)
Takayoshi Konishi(Shizuoka Prefectural Asagiri Field Activity center)
Masayoshi Ota (Faculty of Education, Tokoha University)

1. はじめに

公益社団法人日本キャンプ協会（以下、日本キャンプ協会）は、1999年から日本キャンプ協会に登録している指導者がキャンプを実施する際に割安な掛け金で加入できる「キャンプ保険（国内旅行傷害保険）」、「デイプログラム保険（レクリエーション保険）」を用意している。本研究では、「キャンプ保険」の1999年4月から2016年3月までの17年間に保険金請求があった怪我や事故概要の分析を行う。

野外活動の事故事例の分析は、青木ら¹⁾による国立青少年教育施設における事故事例の収集・分析、伊原³⁾による日本キャンプ協会の指導者を対象とした組織キャンプにおける安全の調査、国立オリンピック記念青少年総合センター⁵⁾による全国的な野外活動のけが・病気の発生状況に関する研究がある。また、ヒヤリハットの分析は、岡村ら¹⁰⁾による民間野外教育事業者の夏キャンプにおけるヒヤリハットの分析、稲松ら⁴⁾による民間事業者のスキーのヒヤリハット分析が行われている。傷害保険を対象とした事故分析は公益財団法人ボーイスカウト日本連盟（以下、ボーイスカウト日本連盟）による「そなえよつねに共済」の事故データ分析⁹⁾、が行われており日本の野外活動における事故や怪我の傾向

はおおむね明らかにされている。しかし、実際の怪我の重傷度が詳細にわかる傷害保険の事故データの分析は、ボーイスカウト日本連盟による「そなえよつねに共済」によるものだけであり、「キャンプ保険」の事故データを分析することは、キャンプにおける安全管理の質的向上に資するものだと考えられる。本研究はキャンプにおける事故データの分析を通じて安全管理の基礎資料を得ることを目的とする。

2. 研究方法

2.1. 対象

1999年4月（1999年度）から2016年3月（2015年度）までに日本キャンプ協会キャンプ保険事務局に保険金請求があり、事故データが得られた299件の事故を対象とした。なお年度別の加入者総数は得られているもののこれらの属性の情報は得られなかった。

2.2 事故データの分類・集計

キャンプ保険の保険金支払いに際しては以下の情報が取得された。「事故日」、「受傷者情報（年齢・性別）」、「事故状況（記述）」、「通院・入院日数」、「支払い保険金額」。なお「事故状況（記述）」の情報だけでは、データの分析が困難であり、得られた記述をもとに以下に分類・集計をした。「発生場所」、

「プログラム」、「事故の要因」、「傷病の種類」、「受傷部位」。なお、記述から判断が困難なものはどの項目も「不明」として処理した。

2.3 事故データの分析

事故発生状況の経年変化を把握するため、17年間の加入者数と事故発生率、また季節別の傾向を把握するため事故件数と事故発生率のクロス集計をそれぞれ行った。次に事故データを基に、性別、年齢層、プログラムのクロス集計を行った。また、保険金支払い金額が高くなる重傷となった事故は、どのようなプログラムや事故の要因が影響しているのか検討した。

3.結果と考察

3.1 保険の加入者推移と事故発生割合

17年間の加入者は2007年度まで6000人程度だったが、2008年度以降10000人を超えるようになった(図1)。保険請求件数の発生割合は、平均0.25%であるが、2002年度の0.63%が最大であり、2006年度に0.49%の発生があるものの、長期的には減少傾向が続いている。なお、2008年度以降に加入者数増大の要因の詳細は不明であるが、以下の二点が要因として考えられる。第一に日本キャンプ協会が発行する会員向けに発行する会報誌キャンピング第114号(2006年12月発行)¹²⁾において、「キャンプと保険」がテーマに特集されキャンプ保険の詳細や事故事例等が紹介された。第二に、2007年度より日本キャンプ協会が主体となり静岡県立朝霧野外活動センター(以下センター)を指定管理者として管理運営を開始し、センターの主催事業の傷害保険としてキャンプ保険を2007年度より開始したことがあげられる。

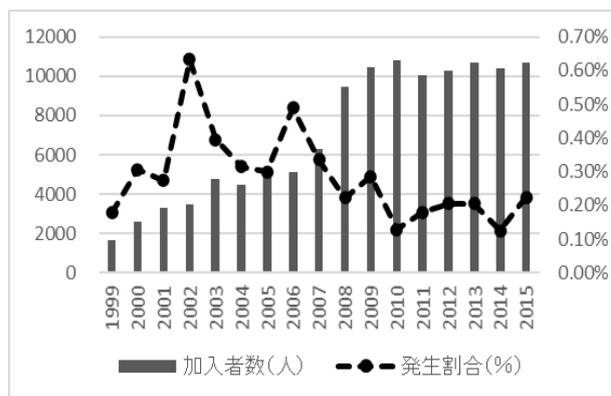


図1 年度別加入者と事故発生割合

3.2.月別加入者数と事故発生割合

加入者数は7～9月の夏季で半数を超える。しかし12月、3月の申し込みもあり、学校などの長期休みに多くの事業が実施されているためと考えられる(図2)。また8月は事故の件数、発生割合とも多いが、1～3月の件数は少ないものの、事故発生割合が高くなっている。冬季はスキー、スケートなど雪上、氷上活動が増え、事故が増加するためと考えられる。これらの傾向は、ボーイスカウト日本連盟による「そなえよつねに共済」⁹⁾でも同様の傾向を示しており、日本の組織キャンプに共通する傾向といえる。

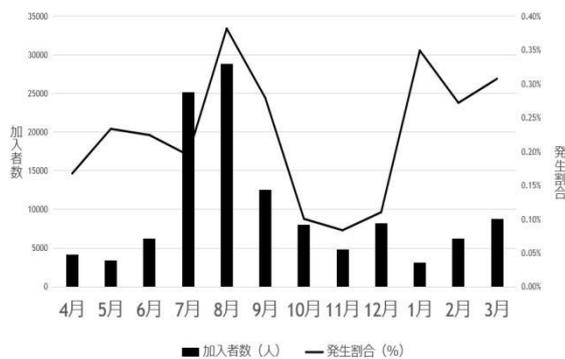


図2 月別加入者数と事故発生割合

3.3 性別と年代別にみた事故の発生件数

男女の事故発生状況に大きな差は見られなかったが、性別と年齢を比較したところ、小学校高学年では男子に事故発生件数が多く、大学生から20歳代の女性は男性に比べて事故発生件数が多かった(図3)。小学生男子に事故発生件数が多いことは、岡村ら¹⁰⁾のヒヤリ

ハットの分析と一致している。しかし、大学生から20歳代の女性が男性に比べ事故発生件数が多いことはどの先行研究にも見られない傾向である。これらの事故件数の性差は保険加入者数が当初より差があったためなのか、それとも事故発生率に性差が生じるのかは判断が困難である。

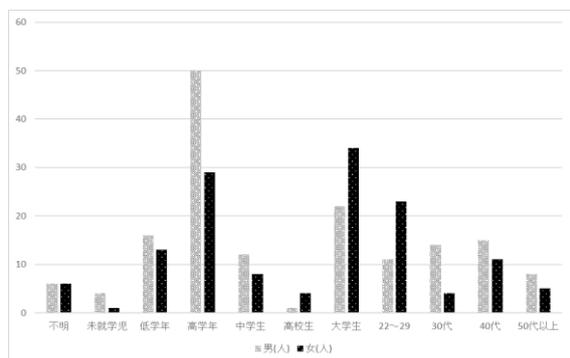


図 3 性別にみた事故発生状況

3.4 事故の要因と発生件数

事故の要因別に発生件数を分類すると上位5項目は、転倒 (127件)、虫・動物 (64件)、物や人が当たる、ぶつかる (33件)、刃物 (25件)、熱源 (20件) であった。おおむね事故の発生要因は先行研究と一致している。転倒では捻挫や打撲による軽傷ですんだ事故から、骨折、脱臼など重傷で入院する事例も多く見られた。虫・動物による事故は虫刺されによる通院が1~2日の軽傷が多い。重傷の事例は少ないものの、マムシなど蛇に噛まれ入院する事例もあった。

3.5 保険金支払い額の分布

キャンプ保険の保険金は通院1日で4,000円が支払われる。通院1日 (4,000円) から3日 (12,000円) の事故が大半を占める。支払いの中央値は12,000円、平均支払い額は29,483円である。なお重傷となった高額な支払いでは、雪上活動のそり滑りによる転倒事故で骨折を伴う大けがで後遺症を含め300万円の支払い、また交通事故による160万円の支払いがあった。なおこの2事故は突出して支払い額が多いため、支払額の平均金額から除外して

いる。

3.6 年齢別に見た平均支払い額

40代を除き、30代、50代以上の平均支払い額は全体平均支払額を大幅に超えている (図4)。ボーイスカウト日本連盟による「そなえよつねに共済」では支払額に関する言及はないものの、事故の約25%は指導者によるものが占め⁸⁾、中高年齢指導者の運動器系の外傷では加齢による生理的な変化により転倒などで容易に骨折することが指摘されている。キャンプ保険でも30代以上では骨折等の重傷度の高い事故が発生しているため、「そなえよつねに共済」と同様の傾向がみられる。

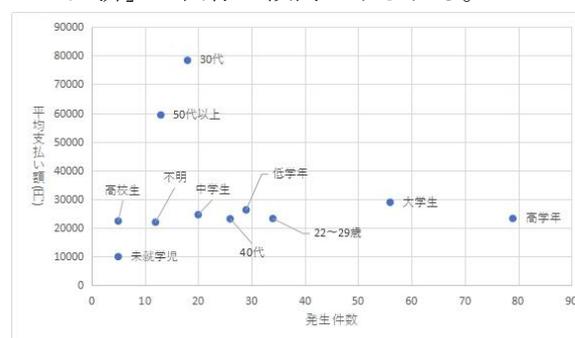


図 4 年齢別平均支払い額

3.7 プログラム別に見た事故発生件数と重傷度、支払額の特徴

プログラム別に見た事故の発生件数は、野外炊飯 (44件)、雪上活動 (34件)、登山・ハイキング・沢登り (27件)、移動中 (24件)、水辺活動 (23件) の順に多く、おおむね先行研究と一致している。

平均支払額の29,483円を超えたプログラムは、雪上活動 (67,862円)、移動中 (42,434円)、アウトドアアクティビティ・スポーツ (38,363円)、水辺活動 (34,105円)、野外炊飯 (29,488円) である。

事故発生件数と平均支払い額をクロス集計すると (図5) 雪上活動は事故件数、支払額がともに多くなる活動で重傷化しやすく事故も発生しやすい活動といえる。また野外炊事も事故が多く発生している活動である。

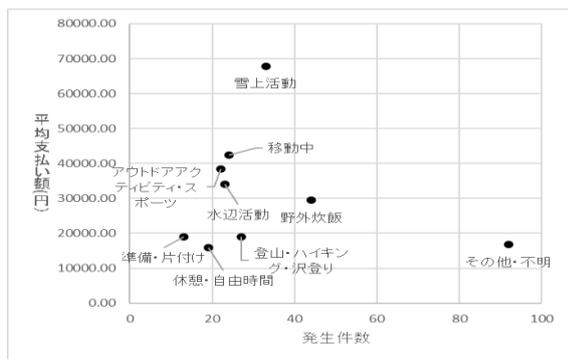


図 5 プログラム別発生件数と平均支払い額

3.7.1 雪上活動における怪我や事故

雪上活動は発生件数（34件）が多く、支払額（67,862円）最も高額であり、重傷になりやすい活動といえる。軽度の捻挫などもあるが、骨折を伴う重傷化する事故が発生している。スキー・スノーボードにおける事故の発生は青木ら¹⁾は危険度の高い野外活動とし、また稲松ら⁴⁾もスキーにおけるヒヤリハット分析から、注意不足、不適切な行動、監視監督不足により重大事故が起こる可能性を明らかにしている。本研究でも雪上活動の事故が起こった際の重傷度の高さが明らかになった。

3.7.2 野外炊飯による事故

野外炊飯における事故件数は、伊原³⁾によるキャンプ指導者を対象とした調査と同様に発生件数が多い。伊原は活動として実施率が高いこと、また刃物や火の取り扱いが多いからであることを指摘している。鉈、包丁など刃物によるけがは、薪割りによる鉈の使用では重傷となりやすく、反対に包丁によるけがは軽傷で済んでいる（図6）。

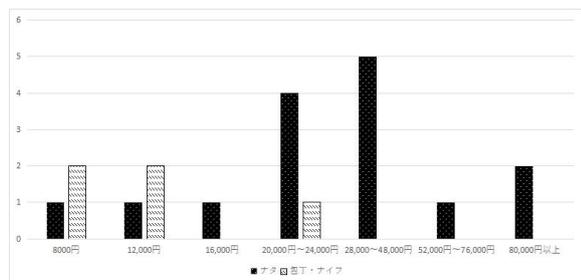


図 6 刃物別による支払い金額
鉈の使用による怪我についてはボーイスカ

ウト日本連盟の鉈の事故の分析⁷⁾によれば、日本ジャンボリーに参加したスカウト200人に1人の割合で鉈による事故が発生している。鉈による怪我の発生要因として技術が未熟、経験不足、不適切な使用方法、不十分な地面、対策の不徹底、堅い薪等があげられている。

なお、近年では鉈の代わりに、刃が固定されている薪割器「キンドリングクラッカー」²⁾を導入する青少年教育施設もあり^{6) 11)}、今後は鉈による事故の減少の可能性が考えられる。

4. 結論と課題

本研究ではキャンプ保険における事故の概要を把握することができ、おおむね先行研究と一致する結果となった。しかし、事故データの詳細な分析は、加入者の総数や加入者の属性（指導者か参加者）、事故時の活動プログラムの詳細や発生時間などが不明であり困難であった。また若い女性の事故が多い結果に対する分析は課題である。

今後は、事故発生後の保険金請求時の聞き取り情報のより詳細な定型化が必要である。また、本研究は2015年度末までの情報であり、2016年度以降の事故分析も今後続けていく予定である。

なお本研究は2021年第24回日本キャンプミーティングで発表した内容を加筆、修正したものである。

引用文献

- 1) 青木康太郎、小林祥之(2021)青少年教育施設における危険度の高い活動・生活行動の現況と安全対策に関する一考察、キャンプ研究、公益社団法人日本キャンプ協会、24、25-36
- 2) ファイヤーサイド株式会社 キンドリングクラッカー
<https://www.firesidestove.com/products/kincre> (2022年9月12日閲覧)
- 3) 伊原久美子(2016)団体や施設におけるキャンプの現状、公益財団法人日本キャンプ協

会設立 50 周年記念事業 キャンプ白書部会

(編)、キャンプ白書 2016、公益社団法人日本キャンプ協会、29-46

4) 稲松謙太郎、砂山真一、高瀬宏樹、岡村泰斗 (2016) 民間野外教育事業者におけるスキーヒヤリハットの分析、キャンプ研究、日本キャンプ協会、19、31-36

5) 国立オリンピック記念青少年総合センター調査連絡課 (1999) 小・中学生のキャンプ中のけが・病気の発生状況に関する研究、自然体験活動中の安全に関する調査報告書、国立オリンピック記念青少年総合センター調査連絡課 55-62

6) 国立曽爾青少年自然の家 キンドリングクラッカーの使い方

<https://soni.niye.go.jp/archives/activitprogram/> (2020 年 9 月 14 日参照)

7) 公益財団法人ボーイスカウト日本連盟安全委員会 (2011) 15NJ ナタの事故に関するアンケート結果、SCOUTING、公益財団法人ボーイスカウト日本連盟発行、2011 年 7 月号

8) 公益財団法人ボーイスカウト日本連盟安全委員会 (2011) 減少しない指導者の事故、SCOUTING、公益財団法人ボーイスカウト日本連盟発行、2011 年 9 月号

9) 公益財団法人日本ボーイスカウト連盟 (2020) そなえよつねに共済 事故データの分析、野外活動のための安全・安心講座 46-63

10) 岡村泰斗、稲松謙太郎、砂山真一、高瀬宏樹 (2015) 民間教育事業者によるヒヤリハットの分析、キャンプ研究、日本キャンプ協会、18、29-36

11) 静岡県立朝霧野外活動センター 利用の手引き

<http://asagiri.camping.or.jp/> (2020 年 9 月 14 日参照)

12) 社団法人日本キャンプ協会 (2006) 特集 キャンプと保険、キャンピング第 114 号、2006 年 12 月発行